



# 「語りベシアター」の 展開と可能性

関西の豊穡な歴史や文化、  
まちのエピソードや将来の可能性などを、  
語りと音楽、映像をまじえた独自の手法で、  
楽しくわかりやすく伝えていく「語りベシアター」。  
今日までの経緯や今後の展望について、紹介する。

## 地域の魅力発信と 新たな担い手の育成

失われてしまった。

一方で、研究者や自治体などにより、さまざまな調査や記録がまとめられている。これらを繙(ひもと)き、「今生きている人が共感を覚えるようなまち物語として、まずは地元の方に知ってもらい、面白い話が語れる大阪人を増やしていこう」と考えたのが、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所長(当時)の倉光弘己氏で、初回の公演に向けて、筆

者はひとつの作品づくりを任された。

そのタイトルは「曾根崎心中考」。まだパソコンが浸透していない時代、スライド映写に講談調の語りを、という倉光氏の提案であった。が、「栗本さんの思う通り自由にやってもいいよ」と言われ、それならばと、音楽と歌を入れドラマチックな演出を実験的に試みると、満場の拍手喝采をもらった。それが今日の活動の原点となった。

## 旗揚げは 「なにわ」から

語りべになって、大阪の歴史や文化を掘り起こしてみませんか——。こんな呼びかけで、「なにわの語りべ」公演を始めたのは、1994年5月。場所は、大阪市天王寺区の生花卸売市場跡の仮設小屋「一心寺シアター」。約

250名の観客が詰めかけた。

大阪には、ユニークな歴史や文化的な話がたくさんあるのに、あまりに知られていない。大正期に船場(せんば)に代々続く老舗の旦那衆が本宅を他の地域に移し、さらに戦後から高度成長期にかけては、他のまちから出稼ぎ人が流入してきたからである。また、合理性を求め過ぎるが故、長年培われてきた地域文化への価値認識が弱まり、伝承力が

いる。

## 活動の趣旨と手法

活動の趣旨は、第1に、まちの歩みやエピソードを紹介しつつ、今ここにいる私たちとのつながりを意識して、現在そして未来への地域発展の可能性や願いをこめたメッセージとして伝えること。第2に、そんな語り手を地元を増やすこと。そして第3は、まちの歴史的文化的資源を活用し地域が元気になる方法として、ひとつの地域にとどまらず関西ひいては他の地域にも応用できる雛型とすることである。手法としては、語りと映像、そして音楽(生演奏)のコラボレーションを基本形式とし、主題によって演出を加える。歴史に興味のない人も、楽しみながら聞いてもらいたいと考えた。

このような趣旨で、本格的に主催公演の企画提案を始めたのは2006年頃からである。一方で筆者は、フィールドワークによる資源の発掘や執筆、地域力に着目した研究会の運営、地域雑誌の取材など、視野を広げ題材をあたためていた。

おりしも当時のわが国では、地域に對するとらえ方が変わりつつあった。「集客都市」という概念が着目され、2003年に国土交通省を中心に、インパウンドの観光客を増やす「Visit

Japan」キャンペーンが掲げられた。そこから、まち歩きガイドをはじめとする、まちの文化資源を生かした「もてなし」を考える気風があちこちで生まれ育ってきた。そこで語りべ活動も、まち歩きと連動した地域の賑わいづくりや、文化振興へも寄与できると考えた。さらに、団塊の世代が還暦を迎え始める2007年頃から、アクティブなシニア層を中心に、地域や地元への意識が高まる気運が出てきた。それは「自身が過ごしてきたわがまちについてもっと知りたい」「まちの歴史的な変遷の中で自分の立ち位置を確認したい」という思いであり、地域への愛着が深まれば、おのずと人やまちの元気へとつながる。人口がますます増えつつあるシニア層へも、語りべ活動がお役に立てるはずだと改めて活動の意義を再確認でき、自信を持つことができた。

## 大阪から関西へ

2007年3月、新聞社との共催という運営スタイルで、単独公演が実現した。活動の趣旨目的に賛同してくださった朝日新聞社様とともに、公演を運営し開催回数を重ねた。以降、共催のパートナーとして産経新聞社様、神戸新聞社様にも協力していただき、ほ



「上方芸能の舞台としての大阪——上町台地時空散歩」より。(平成)なにわの語りべ劇場/2012.3)



## これまでの上演作品

- 「曾根崎心中考」
- 「大阪モダニズム物語」
- 「水都大阪、中之島ものがたり」
- 「夫婦善哉考——織田作之助の世界」
- 「嗚呼、道頓堀・心齋橋——街は劇場、ミュージアム」
- 「淀川ものがたり——治水翁 大橋房太郎」
- 「梅田は西からやってきた——ターミナル開発ものがたり」
- 「上方芸能の舞台としての大阪——上町台地時空散歩」
- 「通天閣ものがたり」
- 「谷崎潤一郎——愛と創作のジャンクション」
- 「神戸、居留地ものがたり——多文化共生の街」
- 「甲子園ものがたり」
- 番外編 「奈良女子大学ものがたり 創立100周年記念」
- 「住吉大社ものがたり」(チャレンジ公演)
- 「マッサンと帝塚山開発物語」(チャレンジ公演)

## 呼称と ロゴデザイン について



大阪で公演を立ち上げたこともあり、公演名を「平成のなにわの語りベシアター」と銘打ったが、大阪から他地域へ活動を広げる頃から、改めて呼称の検討を始めた。担い手の方々のチャレンジ公演の機会が広がる可能性も高く、同じ趣旨目的をもつグループであることを示すために、統一した呼称やロゴを使用したいと考えた。結果、活動名を「語りベシアター」とし、ロゴデザインを作成、大阪ガスの商標として登録済みである。



乙女文楽と共演した「谷崎潤一郎——愛と創作のジャンクション」より。(2015.3)

わがまちの歩みや魅力を改めて知ると、それが誇りへとつながっていく。住民ひとりひとりの心に、そんな元気の素を届けたい。よりよい暮らしやまちづくりを目指して、何らかの試みや運動が生まれる契機になればうれしい。自治体やNPOの方々には、まちの活性化のためのヒントにしていただければと、さまざまな願いをこめて活動を展開してきた。

今年3月に西宮で開催した公演の来場者の感想を一部紹介する。「住んでいる土地にゆかりの人や場所、建築物について知ることができた」「自分の街が好きになった」「歴史、音楽、伝統芸能まで、さまざまなジャンルが融合され、地域の魅力発信の理想の形だと感じた」等。



語りベシアターチャレンジ公演・出演者一同。(2014.10)



語りベシアターチャレンジ公演の模様。「マッサンと帝塚山開発物語」より。(2014.10)



語りベ体験講座・ワークショップより。(発声講座の模様/2013.10)

## 新たな担い手・ 後継者の育成

新たな担い手づくりの必要性も強まってきた。総合監修と語り手を兼ねる筆者中心のユニットだけでは一代限りとなり、1年間に発信する頻度も限られてしまう。シナリオや画像をつくり、発表できるメンバーを育て増やしていけば、もっと各地域への発信力や浸透力が強まるはずである。

し、卒業生が翌2014年春から、自分たちで作品をつくることになった。住吉界隈に題材を求めることにして、7名が2チームに分かれシナリオや画像を提案してもらい、筆者が内容についてアドバイスをを行った。作品は「住吉大社ものがたり」「マッサンと帝塚山開発物語」。同年10月、「語りベシアター・チャレンジ公演」として都市魅力研究室で発表会を開催した。お客様からは「わかりやすい。面白かった」と評判が良く、以降、住吉区で2回、外部団体の企画で公演を行っている。2015年度も活動を継続することになった。語りベ活動の第二フェーズは、まさに立ち上がったところである。

## 関西再発見の よろこびから、 まちの元気づくりへ 〜今後の期待と課題〜

今年3月に西宮で開催した公演の来場者の感想を一部紹介する。「住んでいる土地にゆかりの人や場所、建築物について知ることができた」「自分の街が好きになった」「歴史、音楽、伝統芸能まで、さまざまなジャンルが融合され、地域の魅力発信の理想の形だと感じた」等。

一方で、担い手・後継者の育成については、大阪だけでなく関西の他の地域を題材に活動を行う人材の発掘と育成、とりわけ若い世代や学生にも興味を持ってもらうための機会づくり等、地道な取り組みが必要である。それぞれの地域で、地元の方々の手による「語りベシアター」の活動の輪が広がっていくことを期待したい。